

明治維新―八幡大菩薩と廃仏毀釈

高尾 隆

長い間日本は世界でも稀に見る自己完結に近い歴史を歩んできた。島国ゆえの特性と言えるのか、外部からの文明や文化は柔軟に取り入れるが、他国との外交的交流は積極的には行っていない。侵略されることのない独自の国家を形成し、260余年の江戸時代においては、戦らしい戦のない民主的で平和な社会を築いてきた。その殻が破られたのが明治維新である。

当時アジアは列強の世界侵略の波に飲まれ、日本にもその危機が迫っていた。その弱小国がこれを凌いでいくには、新しい国家体制の構築とその内面的な弱さや不安を打ち消すための精神的なバックボーンを必要とした。

時代の変遷を見続けた浦賀

南房総と向かい合い東京湾（江戸湾）の入口をすぼめるように三

浦半島が突き出ている。幕末、諸外国は幕府に国交を求め頻繁に江戸湾近海を訪れる。その海防上の監視を行うのに最適だったのが三浦半島であり、その活動拠点になっていたのが浦賀である。浦賀は深く切れ込んだ入江で、地理的にも海運に適した場所として長い歴史を持つ。

その港は戦国時代より房総半島で生産される干鯛を関西へ輸送する中継地として発展していた。享保5年（1720）江戸湾内の経済活動の活発化に伴い、それまで近海の船舶の監督や貨物検査を行っていた下田奉行が浦賀に移れると、全国的な流通市場における重要拠点としての地位を獲得する。

しかし文政元年（1818）イギリス商船が浦賀に通商を求めて来港すると、以後ペリー来航、明

治維新まで時代の矢面に立たされる。

その浦賀奉行所があつた港の西側に養和元年（1181）創建の叶神社がある。縁起によれば『平家物語』に登場する文覚（もんがく）上人が源氏の再興を願って房総半島の鹿野山で修行し、「その願い叶え」と祈願しこの地を選び、石清水八幡宮（いわしみずはちまんぐう）を勧請した。文覚上人は元は鳥羽天皇に仕える北面の武士だったが出家した後、後白河法皇の怒りに触れ伊豆に流された。そこで長く伊豆に配流されていた源頼朝と出会い源氏の挙兵を勧めたという。この縁起からも頼朝の伊豆―鎌倉―上総を結ぶラインを中継する中世の浦賀の歴史的背景が推察できる。



廃仏毀釈の憂き目に遭った叶神社
叶神社は石清水八幡の神を勧請

した時から僧侶との関わりが深く、仏教との因縁を神社創建以来持っていた。平安初期以来、仏教面から説かれた本地垂迹（ほんちすいじやく）本體たる仏菩薩が衆生済度のために、日本の神の姿になって現れること」という思想に基づく神仏習合は千年近く、日本の宗教界の主流を形成して来た事は、広く知られており平安・鎌倉時代は特に盛んであつたと言える。

叶神社も明治元年まで、神社の管理・運営及び祭祀までを真言宗（古義派）の僧侶によって、司祭・維持がなされてきたのである。この僧侶・寺院を別当（別当寺）と呼ぶ。別当とは大寺院の寺務統轄の僧官の名称であり、天平勝宝4年（752）、良弁上人を東大寺別当に補任したのが初見である。しかしここでの別当とは、叶神社の別当寺と云う意味である。しかも、この別当寺の僧侶が神官の役割をも果たして来たのである。後述べる鎌倉八幡も同様である。

叶神社の別当寺は、虚空山感応院、寺号西栄寺と号し、本尊は不動明王であつたが、古くは、文覚上人自刻の虚空蔵菩薩であつたと伝わっている。

しかしいまの叶神社には明治の廃仏毀釈という神仏分離策により感応院は存在しない。歴代住職は、初代を開基文覚上人として、明治元年（1868）まで、69代に及んだが、時の法印玉応は、別当住職をやめて神官となり、「神明の感応と奇瑞の現象を永く記念せんが為」（『郷社叶神社史』）姓を感見（かんみ）と改め、感見清（神明）と名乗った。

神仏習合のはじまり

我国に仏教が伝来した時代、594年推古天皇は「仏教興隆の詔」を発する。以後我国に鎮護国家の国家思想が芽生え、仏像仏具を製造する精錬技術が発達し、寺院建立による建築技術が向上する。また過去・現在・未来という三世因果に基づく善悪というものの道德的観念が浸透していく。こうした経緯の中で僧侶によって和文字が発明され、文学が発達するなど日本文化は仏教を抜きに語ることはできなくなる。

やがて日本の古来の神々と仏教の間に調和が生まれ、対立することなく互いに融合し日本文化興隆へと進んでいく。この神仏習合の考えは日本の歴史上における国民

的特性と言えるものである。人は生まれた場所の自然の中で、モノを育み、成長させ、暮らして一体となって歩んでいくものである。日本にやがて来た仏教が、日本独自のものとなり他国の仏教と異なってしまうは当然のことである。神仏習合の考えは日本人の心であり、アイデンティティとなるのである。

この仏と神が融合する過程に現れた顕著な例が、8世紀の終りに一部の神を『菩薩』と呼ぶようになったことである。そのきっかけとなるのが『八幡神』だ。八幡神は仏教信仰と応神天皇信仰が結びついたもので、八幡神が菩薩（仏教）によって守られるという前述の本地垂迹説によるものである。明治までは『八幡大菩薩』と称した。

こうして神仏習合は進み、八幡神の起源である宇佐八幡宮より石清水八幡宮が勧請され、天照大神と並ぶ天皇家の始祖神としての地位を得る。その後源氏の守護神となつて武門の崇敬を集め、関東御家人の移動によって信仰は全国に広がり、今日最も多くの神社を持つ神となる。

南無八幡大菩薩

古都鎌倉の鶴岡八幡宮は石清水

八幡宮より勧請されたものであり、八幡宮と源氏との深いつながりを示すものである。清和源氏の流れをくむ源頼信の子頼義は石清水八幡を武運の神として厚く信仰していた。ある時、社殿に参籠した際、運命的に授かった我が子義家を元服するにあたり八幡太郎と号した。その後、頼義は前9年の役を平定した帰り康平6年（1063）、鎌倉由比郷に石清水を勧請し社殿を創建した。これが鶴岡八幡宮の起源となる。



そして武門の鑑となる源頼朝が登場する。伊豆蛭ヶ小島に流され20年の艱苦を耐えた頼朝は、治承4年（1180）源氏再興に立

ちあがった。しかし石橋山の戦いで九死に一生を得て安房へ渡る。その後頼朝は上総氏、千葉氏等の関東武者の支持を得て勇躍、武蔵をまわり鎌倉へ入る。この時、我身に守護神八幡大菩薩の加護を信じたに違いない。鎌倉では荒廃していた由比の鶴岡八幡を遥拝し、若宮の地に新たな鶴岡八幡宮を遷した。この時文覚上人が頼朝に接したかどうかは定かではないが、翌年叶神社を創建する時、上人は我が意を得たりの心境であつたらう。

その後の平家追討は完璧に遂行され、屋島の合戦で那須与一が矢を放つ際に念じた「南無八幡大菩薩」は源氏の興隆を象徴するものとなり、以後八幡信仰は武家社会の定番となる。

鶴岡八幡宮寺と呼ばれる寺

寿永元年（1182）真新しい鶴岡の社殿とその裏に別当坊と二十五坊が完成した。二十五坊は供僧（ぐそう）と呼ばれる神社に奉仕する社僧達の住坊である（江戸時代には十二坊に）。別当職には頼朝と従兄弟同土である三井寺の円曉が就く。若宮大路の参道が整備され、境内に放生池が造られた。

以後、鶴岡八幡は「鶴岡山八幡宮寺」の山号寺号を持つ名刹として広く知られ、その後大火や兵火にまみれることもあったが、時の武将や権力者に護られる。江戸時代には幕府の手厚い保護があり、上下宮、仁王門、大塔、護摩堂、輪藏、神楽殿、愛染堂、六角堂などが造られ十二院の社僧があった。將軍家光の時には薬師堂、鐘楼、楼門などを造営して寺領500石が与えられた。またその境内には東照宮を造営した。

しかし800年近く続いた武家支配の時代が終わる時、神（八幡神）と仏（菩薩）を切り離す文化的革命が起きた。明治新政府が打ち出した神仏分離策、廃仏毀釈である。

王政復古の名の下に

慶応3年12月9日「王政復古」の号令が布告された。この「古」に「復す」とは「諸事神武天皇の創業に習う」とのことであり、神武天皇の時代にあつたと信じられている祭政一致の政体国家に戻るという意味であつた。そして慶応4年（明治元年）五箇条御誓文が布告される前日3月13日に太政官より神祇官再興が布告され、翌々

年正月に大教宣布の詔が発せられ、神道国教化が国是となる。

この考えは有栖川宮を総督として西郷らが江戸へ東征を行っていた頃、岩倉具視やその顧問玉松操らによつて密かに練り上げられたものだつた。日本書紀冒頭の神国創成の物語が、明治の国家神道に吸収される。この神話こそが民族統一のため、新政府にとつて絶対的なものであり、物語のすべてが皇室を普遍的で崇高な存在にするためであつた。

神道国教化には平田派・津和野派の国学者であり、神祇官となつた大國隆正、平田鉄胤（平田篤胤の養子）、亀井茲監、福羽美静などが主導し「神仏分離」の官令を出す。この神道第一を国家的な意思と示すために、国権を利用し廃仏毀釈という暴挙が全国で扇動され広がり、寺院仏閣、仏具、經典などが無残にも破壊されていったのである。

特に新政府を先導した薩長はじめ国学思想の顕著な旧藩の行動は破滅的であつた。多くの僧侶はこの命にはむかうことなく、信者を見捨て身を守るために還俗していった。日本古来の重要な文化財

が破壊または焼却され、また二束三文で海外へ流出した。その被害たるや当時の国宝級の文化遺産が3分の1この国から消滅したといわれる。

明治新政府は神道を民族統一の思想的指針とするために、仏教やキリスト教やその他の宗教はすべて、外来の思想であり、それを信じる者は排除しなければならなかつた。このあまりに無謀な行為は、前者は民意によつて、また後者は西洋からの批判によつて緩和・修正されるのだが、そのダメージはあまりにも大きすぎた。

この天皇制に直結する神道の国教化は、後の日本の負の遺産を作り上げる元凶となつたことを否定できない。

大塔が消えた鎌倉八幡宮

新政府の太政官達に「この度、大政御一新につき、石清水、宇佐、筥崎等、八幡大菩薩の称号止めさせられ、八幡大神と称し奉り候様、仰せ出され候こと」とあつた。鎌

倉八幡宮もこの災難から逃れることができなかつた。明治3年（1870）境内の薬師堂・護摩堂・大塔・経藏・仁王門が撤去され、その大部分は破壊され、仏像も仁



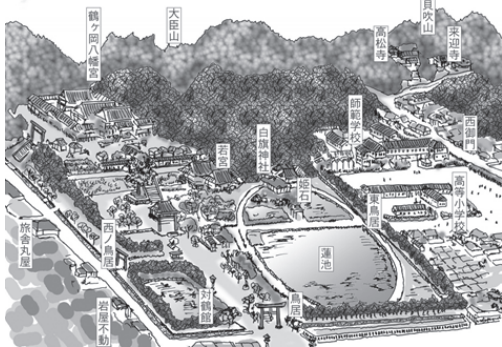
「大塔」明治3年以前ベネト撮影（筆者模写）

王像・弘法大師像（その後手広の青蓮寺へ）や神宮寺の薬師三尊像（その後あきる野市新開院へ）。愛染明王などは寿福寺に納められた。また買い取られた経文以外は焼き棄てられた。

そして12院の僧は還俗し髪を伸ばし、妻帯肉食の世俗の身となつた。しかし神職に上手く転身できた者は良かったが、落ちぶれたものは豆腐売りや車夫になつた者もいたという。

なぜなら当時の国家体制は安定せず、新しい貨幣経済は借金の上に成り立ち、巷には身分を失つた武士や無頼があふれていた。鎌倉八幡宮は荒れ果て境内は競馬場となり仁王門の脇に馬券売り場が設

けられ、池の周りを馬が走っていた。何のための神仏分離なのか、誰にも利することのない暴挙であった。



明治 29 年版「相模国鎌倉名所并江之島絵図」(筆者模写)

叶神社では

浦賀港の西岸にある叶神社は現在「西叶神社」と呼ばれている。向かいあう東側に元禄時代分祀した「東叶神社」があるからだ。江戸時代から細長く幅の狭い港の兩岸を渡し船がつないでいる。船先に乗ると海から神社の参道、石段、社殿が一直線に拝める時間がある。ペリーの来航時、「俺が副奉行」

と称し、旗艦サスケハナ号をくまなく探偵して、ペリーがその大胆な行動に驚いたという奉行与力中島三郎助も日々その神々しい景色に手を合わせていたであろう。今はない別当は現在の社務所辺りだという。

現住の叶神社宮司の感見武氏は第七十四代目(神職宮司五代目)になる。同社の廃仏毀釈について、当時同社でも破壊行為があったのかお聞きすると、「他で起きたよいうなひどいことはありませんでした。ご本尊だけは大切に隠して保管しました。この辺の寺社は皆そうしたと思いますよ。」との答えだった。

〈参考文献〉

- ・ 廃仏毀釈百年・虐げられつづけた仏たち 佐伯恵達 鉾脈社
- ・ 神々の明治維新―神仏分離と廃仏毀釈・安丸良夫 岩波新書
- ・ 鶴岡八幡宮寺・鎌倉の廃寺・貫 達人 有隣新書
- ・ 神道とは何か・神と仏の日本史・伊藤 聡 中公新書
- ・ 浦賀湊の景観及び機能とその変容過程 歴史地理学調査報告1 2号 加藤晴美・千鳥絵里

土佐藩士の職務異動から幕末・明治維新期の時勢を読む

中村 康 男

土佐藩士下村銈太郎盛俊は、私の高祖父で、高知県立高知城歴史博物館所蔵の「御侍中先祖書系図牒」によると、元祖下村五郎兵衛盛明から数えて九代目に当たり、父が庄左衛門盛則、跡取りが省助盛吉である。

私の祖父盛枝は省助盛吉の三男で、中村の養子となるが、下村姓を継ぐ者がいないので、我が家を谷中の墓を守っている。盛俊の江戸時代最後の要職は藩の大目付であった。明治に入り、山内容堂と三条実美の御側御用役を務め、中老職となる。明治五年に工部省の鉄道助に就任し、明治十年にその生涯を終える。この度は盛俊の職務異動の変遷から、幕末・明治維新时期の時勢を読んでみたい。

一、要職に就任

《》は、御侍中先祖書系図牒の滝口正哉先生による現代語訳の一部抜粋である。

《・天保七(一八三六)年三月下村

家の惣領となる。
・安政五(一八五八)年御郡奉行・御普請奉行御物頭格(次席)となる。》

当時の土佐藩の実力者である山内容堂は幕政と將軍継嗣問題に積極的に介入し、四賢候と呼ばれる松平春嶽、島津斉彬、伊達宗城らと共に徳川慶喜を推す一橋派として、井伊直弼ら幕府主流派と対立していた。土佐藩内においては、近習家老福岡宮内(孝茂)の仲立ちにより、容堂の信任が厚い吉田東洋が安政五年参政に復帰した。土佐藩の厳しい上士・下士の身分制度の伝統からすれば、上士だが長曾我部の遺臣であった東洋の人事は、異例の抜擢である。その東洋は上士の中でも中流層の後藤象二郎、福岡藤次(孝弟)、板垣退助等の若い人材を登用した。この時盛俊も御郡奉行・御普請奉行御物頭格に就く。ついでに言うとう、容堂は下級武士を蔑んだ」という